
村の定めとあの日の約束 1

伊藤鷺津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

村の定めとあの日の約束 1

【Nコード】

N1617W

【作者名】

伊藤鷺津

【あらすじ】

悲しき運命から逃れられなかった少女が過去にいた。

それに立ち向かえなかった少年が過去にいた。

少女と交わした約束を今、果たしに行く男がいた。

時間が過ぎる儚さを描いた小説。

過去と今と、そして未来

「……ガタン、…ゴトン。」

電車に揺られ　は、窓から入ってくる夏の涼しげな風に心地よく吹かれていた。

一本の電車が、夏の田舎を走ってゆく。

目的は……、特に無い。

ただ、あの頃あつて、今は無い「大切な何か」を求めて大学の長期の休みを使いこの無計画な旅に出た。

やがて、電車は無人駅に着いた。

電車から降り、辺りを見渡す。

見る限り田園しかない。

チケットを改札に入れて駅を出た。

「……まさに、本当の田舎って感じだな。」

乗客は自分一人しかいなく、他の人にバスがあるのかさえ聞くこともできない。

確かに、あまりに無計画過ぎたのではないかと、今になって少しくらいは調べておくべきだったと思った。

村の定めとあの日の約束2

“変わらないもの”は、この世界にはないのだろうか……。
この頃、不思議な夢をよく見る。

それは、人間がいなくなつた世界にただ一人自分だけがいて、他に生きてる人を探す旅をしているという夢だった。

しかし、辺りは廃墟の建物があるだけで、いくら探しても誰もいない。

…… やつぱり、オレ一人だけなんだと、そう思い雑草だらけのアスファルトをまた歩き出す。

この世界は遠い未来の世界なのだろうか。

人類が進化した成れの果てがこれなのか。だが、どうしてこのようになつたのかは、知りたいとも思わない。

それよりも、もう一人は嫌だった。

どんなことでもいい、ちょっとした事でもいいから誰かと分かり合いたい……。もう、……。一人はイヤだ！

「……………はっ！」

不思議な夢から目覚めると、緑が広がる田舎にいた。

「オレは……………、バスを探していてそれからどうしたんだ。」

「……………このバス停まで私が案内したら、いきなり倒れちゃったんだよ。」

驚いて隣を見ると、自分と同じくらいの歳の女子大生が右脇に座っていた。

「……………キミが、オレを？」

「……………覚えてないの？」

肩までまつすぐ伸びた髪に、くつきりした鼻とぱっちりした目。夏に吹く風のように涼しげな感じた。

……しかし、こんな和風のな子と会った記憶がない。

「とりあえず、ありがとう。」

助かった。」

「どう致しまして。」

クスリと笑った笑顔もまた、涼しい。

「ところで、なんでこんな田舎に来たの。」

「なぜだろうな。」

あえて言うなら昔はあつて今は無いものを探しに……ってとこだな。

「

「ふーん、それは何なの。」

「分からない。」

ただ、心の中のもの、とだけは気付いているんだが。」 「過去

は振り返ることは出来ても、戻することは出来ない……………」

「…………えっ？」

「私、そう思うんだ。」

少しは参考になった？」

「過去へは戻れない、か……………」

ちよつと分かったような気がする。」

「うん、役に立ててよかった。」

あ、バスが来たよ。」

彼女が指をさした方から古ぼけた小さなバスがこちらに向かってきていた。

やがてバスは止まり、扉が開いた。

乗客は誰もいない。「それじゃ、昔あつたものを捜しに行こ。」

そう言い、彼女はバスの階段からこちらに手を伸ばした。

「ここからオレの夏が始まるんだな……………」

オレは、その手をしっかりと握り、バスに乗り込んだ。

村の定めとあの日の約束3

「……カナ…カナ…カナ」

陽は既に沈みかけ、村にはひぐらしの淋しげな鳴き声が響き渡っていた。

そして、その夕暮れの中を歩く二人がいた。

「やっと着いた」。結構かかったね。」「……まさか4時間もバスに乗り続ける事になるとは思ってもなかったよ。」

永遠と続く砂利道を走るバスに揺られ、着いたかと思いきや、そこからまた1時間程歩き、ここまでようやく辿り着いたわけである。

疲れも既にピークに達そうとしていた。「もう陽も暮れちゃったし、今日は私の家に泊まるって事でいいよね。」

余りにも唐突な質問だった。

「え」と、その……迷惑がかかるんじゃないか？」

泊まる宿も決めていなかったオレにとつては願ってもない話だったが、今日初めて会った彼女の家に泊まるのは少しの躊躇いがあった。それに、彼女の家の都合というものがある。

「キミなら家に泊まりに来て、私の親も大歓迎すると思うし……」。

とにかく、今日は家に泊まっていきなよ。」

そう言つて彼女はオレの手を引っ張っぱて、歩き出した。

オレもまた、手を引っ張られて夕闇の長い畦道を歩き出したのであった。

村の定めとあの日の約束 4

「チリ……チリーン。」

夕食を終えて二人でスイカを食べている居間に、風鈴の涼やかな音が鳴り響いてきた。

「これこそ、日本の真の夏夜と言すべき光景だな。」

「そう？」

私は、もう18年間この光景を見てきたから別に何とも思わないけど。」

「オレは、凄い羨ましいな。」

「うーん、やっぱり私には分かんないなあ……………」

「都会の人と田舎の人じゃそういった感覚が違うのかもな。」

「そうかもね……………」

こんな他愛ない話をしている内に、もう23:00を回ろうとしていた。

「じゃ、明日は早起きしてこの村の色々な所を紹介するからもう寝よう。」

「そっか、それじゃお休み。」

そう挨拶をし、自分の寝室に向かった。

村の定めとあの日の約束5

「……おはよう、よく眠れた？」

「ああ、昨日かなり疲れたからな。よく眠れたよ。」

「よかった、……私、自分の家じゃないと中々眠れない方だから。」

「それはオレも分かる気がするな。」

「さっ、朝ご飯出来たし早く食べて散策に行こ。」

オレよりかなり早く起きて朝メシを作っていたのであるう、ちやぶ台には手間ヒマかけて作られた旅館で出てくるようなおかずが並べられていた。

「ありがとな、こんなに。」

「えッ！？いつもこんな感じだけど……。」

「そ、そうか……、いつもこんな感じなのか……。」

「それより早く食べてみてよ、急いで作ったから味の方がどうか……。」

「ああ、それじゃ、頂きます！」

箸に取ったものの全てが料亭並の味だった。

「お前、凄いな。」

どれも板前が作ったようなものばかりだ。」

「よかった、これから毎日作るね。」

「あ、ああ……、無理しない程度でいいからな。」

「大丈夫だよ、いつもこんな感じだから。」

本当に大丈夫なのだろうか、心配しながらも彼女の作った“料亭並の料理”を凄い勢いで食べるのであった。

村の定めとあの日の約束 6

爽やかな風に揺れる緑の田地が夏をより引き立てている。

そこを白いワンピースを着た少女とその後ろを歩く推定身長180？程の前髪を三本、左に垂らした大人の雰囲気少年がいるのみだった。

「なあ、さつきから誰とも会わないが……。」
一時間は歩いているというのに誰ともすれ違わない。

周りには茅葺き屋根の民家が建っているにもかかわらずだ。明らかにおかしかった。

「夜になるまでは、大丈夫だから。」

意味がわからない、質問に対する答えになっていない……。」「……あの夜の事、覚えてない？」

「あの夜って……昨日初めて会ったのに、昔どうかで会ったか？」

「……ゴメン、気にしないで。」

「……そ、そうか。」なんか、変な雰囲気になったな……。

「それより、次はどこに連れてってくれるんだ。」

「……次は、この村の神社を案内してあげる。」

結構大きな所なんだよ。」

「へえ、そんな所があったんだな。」

この村、入り組んでるからわからなかったよ。」

「うん、相当土地勘のある人じゃないと迷って野宿、なんて事にもなるよ。」

「それだけは勘弁だな……。」

君に会えて本当によかった。」

「そういえば、名前聞いてなかったよね。」

今になってようやく自分も気付いた。

丸一日を共に過ごしているにもかかわらず、だ。

全く、我ながら恥ずかしい限りだ。

「……斬二だ、宜しくな。」

「私、火奈……。」

神代火奈。

斬二、宜しくね」

カナ………？

なんだか聞き覚えのある名前のような気がした。

昔………の事ではなく、ここと似たような所で聞いたような……。

それに普通、初対面ならもっと片言のような名前の呼び方をするはずなのだが、やけに慣れた呼び方をしている……。

……考え過ぎだな。「斬二………、どうかした？」

「……いや、なんでもない。」

「暑さにやられたんじゃ………そうだ、その神社に凄く冷たくてキレイな水が湧いてるところがあるから、それを飲めば元気になると思うよ。」

「そんな湧き水があるのか、是非とも飲んでみたいな。」

確かにかなり歩いたから喉もカラカラになっていた。

「それじゃ、行こっか。」

「おう、行くか。」そして湧き水を目指して畦道をまた歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1617w/>

村の定めとあの日の約束 1

2011年11月13日19時23分発行